

第 65 話<神戸の貿易商>の要約と参考資料

第 65 話<神戸の貿易商>の要約

神戸に綿布を商う山本商店という貿易商がいました。オーナーの家で女中奉公した婦人の話から、土呂久産の亜ヒ酸を輸出していたのは山本商店だったことがわかりました。祖母・傾山系で亜ヒ酸鉱山を開発したのは、亜ヒ酸で儲けをねらった、こうした事業家でした。

第 65 話<神戸の貿易商>の参考資料

6 5 - 1 登尾鉱山

天正 18 年竿前御改書上帳（西臼杵支庁編『西臼杵百年史』P32～34 より）

高千穂地方の検地は、秀吉の九州征伐のとき黒田勘兵衛に命じて竿入れ（測量のことを竿入れといった）を行ったようで、五ヶ所の矢津田家文書の中に「天正 18 年竿前御改書上帳」があり、当時の各村の石高を知ることができる。それによると、（略）

- 一、高四百拾石壺斗一升六合は 岩戸
- 一、同拾四石七斗九合は 土路久
- 一、同百貳石五斗八升五合は 山裏
- 一、同貳拾貳石九斗八合は 登尾

（略）とあって、高千穂の総石高が、6,140 石余で、これが後の延岡藩の、5 万 3 千石の基礎石高になったようである。（P34）

この「高知尾」の石高表で注意を引くのは、高千穂の村数が、舟の尾以下 23 か村であるということである。このうち後世の村名にならないのは、舟の尾・鹿川・宮水・土呂久・登尾・松ノ平であるが、これはこの当時、一つの村をなすほどの人口があったものと思われる。土呂久にしても登尾にしても、現在は一つの隣組程度の人口であるけれども、当時は鉱山が盛んになり始めたころで、登尾、土呂久は鉱山が開かれて人口が相当あったものと思われる。（P34）

（* 2 1 - 3 と重複）

甲斐畷常著「高千穂村々探訪」

黒葛原^{つづら}、秋元、西之内、登尾を総称して日向^{ひなた}と言っているが、ここは古くから土呂久と共に鉱山開発の行われた地区で登尾の萱野鉱山、黒葛原鉱山は江戸の初期から開発され、中でも萱野鉱山は徳川時代に盛んに採掘され三ツ合はその中心市街をなしていた。桑之内の庄屋の記録に「登尾銀山、戸二千軒」とある。今でも地名に上町、上町谷などの地名が残っている。現在の矢野氏は当時の酒屋あとであり、その下の抽子木谷川、三本松川、本谷川の合流する、所謂三ツ合の三角州には石積の段々に屋敷跡があり、二千軒まではなくとも鉱山町の跡歴然としている。土地の人が代官屋敷跡と称する

所は、おそらく銀山奉行の屋敷ではないかと思われるが、或は三本松関所の役宅かも知れない。女郎墓などもあり最盛時のにぎやかさが思われる。当然寺もあり三ツ合の少し上方に浄光寺あとがある。永享元年（1429）建立というので或は鉾山以前から山裏村（見立を含んだ）の寺かもしれない。（P167~168）
（*21-2
と重複）

65-2 茅野鉾山（萱野鉾山）

川原一之著「口伝 亜砒焼き谷」P74~76より

土呂久から東へ山越して黒葛原、そこから北に秋元、西之内、中野内を通り、東へ折れて登尾部落を抜くると、谷川沿いの斜面を開いた萱野鉾山があった。明治の終りに開発され、大正12年から亜砒鉾山に変身した。盛んなころは、延岡から来た衆に近くの登尾や野々尻から通う衆、合わせて40人も働いておったろうや。亜砒焼きの煙は10町ばかり離れた登尾まで流れ、椎茸の芽が出ん、豆が枯れる、牛が死ぬる。土呂久そっくりの被害も出ておった。（略）

土呂久と兄弟関係の萱野鉾山は、鉾山長が佐藤一郎という男。団鉾づくりに出よった登尾の房子さんが、その佐藤に目をかけられち「神戸へ女中奉公に出てみんか」と誘われた。日向の山ん中から大都會の神戸へ、17の娘には夢んごたる話じゃ。房子さんな「行きます」と返事した。奉公先は、三宮近くの反高林にある大きな大きな御屋敷じゃった。離れのほかに娯楽室も建ってて、身なりのいい紳士が棒の先で玉を突いて遊んどる。房子さんは初めて見る遊びに目を見張った。御屋敷には尋常小学校に通う男ん子と、その上に女ばかりの姉妹がおった。御主人の名前は山本博一。山本商店という貿易会社の社長さんじゃ。房子さんはそのうち、山本商店が萱野と土呂久産の亜砒酸を外国へ輸出しとるちゅう話を耳にした。それもそのはず、山本商店こそ大正12年に萱野鉾山を買いとり、亜砒を焼き始めた会社であった。

山本商店は資本金300万円で、大正8年の設立。哈爾濱、上海、京城をはじめ各地に出張所を開き、綿布、肥料、薬品など手広く貿易しちよった。こん貿易商を亜砒酸と結びつけたのは、アメリカの綿花のごたる。亜砒酸は綿花の害虫駆除剤の原料になる。山本商店はアメリカから綿糸や綿布を輸入する代りに、亜砒酸をアメリカへ輸出した。川田平三郎は土呂久へ来る前に、農薬の取り引きを通じて山本商店とつながりをもった、といわれちよる。そんなころ日本の亜砒酸生産はアメリカの綿花栽培と深く結びついて、綿の相場に亜砒酸の景気が左右されるほどじゃった。

佐藤捨光さんの話（1977年5月3日聴取）

高千穂町上野字王農内から土呂久へは道元越を越えて行くと、1時間20分かかった。わしゃ、ときたまうちから通った。

学校あがってすぐ(大正6年ごろ)、上田久治という鹿児島の人が上野鉦山をやっておられたころ、ここで、じょうれん箱を引いた。上野鉦山は足掛け8年くらい掘った。銅が本当で銀が千分のいくつかある鉦石で。上野に4年くらいおって、土呂久に行ったんです。そのころは始まったばかりで、鉦石を掘るだけだった。そのうちに、石屋を雇って焼き窯をつくりだした。一時、土呂久が亜硫酸の規模を小さくしたもんじゃから、茅野にちょっと回された。親方(佐藤一郎)は土呂久と茅野は同じ。2,3か月で土呂久が復活したから帰って来い、ということで。茅野もそのころ焼き窯ができるころで、仕事はトロ押しです。ルールがはいつて、トロがはいっちゃった。50人くらい働く者がおったでしょうか。土呂久へ帰って、鉦夫になった。

初めは、砂太郎さんのいた川端の長屋に住んでいた。そのあと納屋を一つもろて、四番坑の戸口端の相撲取り場の横の方に。野村弥三郎という人が親方で、弥佐治がよく遊びに来ていた。

三番坑は砂太郎さんが職頭で、その下で働いた。鉦夫は日当、あとは請負이었다。私は22歳まで働いて、弟の繁熊より先に上野に帰った。

本邦鉦業一班より

大正13年 茅野鉦山の鉦業権者は「株式会社山本商店」

亜硫酸 156,179斤 32,127円を生産

大正14年 茅野鉦山の鉦業権者は「株式会社山本商店」

亜硫酸 113,651斤 12,502円を生産

小宮新八手帳

昭和27年11月28日 茅野鉦山(亜鉛鉦)

大正末期頃、神戸の山元商会在亜鉛を操業した際に、佐藤氏が茅野の主任をして居た際時、出した亜鉛鉦である。

65-3 山本商店

山道房子さん(高千穂町登尾、明治40年生)の話(1977年8月6日聴取)

17歳か18歳のころ、茅野鉦山のだんごつくりに出た。そこは佐藤一郎さんが総大将だった。奥さんと一緒に来ていた。坑口は3つ、4つあった。粗製窯は延岡の人がやった。精製窯は1群れあった。誰が焼いたか、覚えておらん。延岡の人が10人くらい加勢に来て、社宅もあった。坑内に入る人も入れて、20人くらい働いたやろか。通いは、登尾や野々尻から行きよった。

製品は馬で運び出して、神戸の山本商会(山本^{はくいち}博一)に送って輸出していた。竹内令さく(貝へんに乍)さんは、ここに関係していない。

登尾へんも、豆類やら柿類はならんかった。牛が死によった。亜砒のせいち、みんな言
いよった。シイタケは芽が出らん。蜂もおらんようになった。「あんな臭いもんは、はよ
やめたがいい」ち言いよった。

わしは鉾山に3, 4か月おって、佐藤一郎さんに紹介されて、神戸の山本さんそこへ行
った。山本さんは、他の国と取引する会社をやっていて、茅野の亜ヒ酸を輸出していた。
兵庫県の三宮近くの反高林（たんたかばやし）におったが、わたしが帰ってから何年か
たって、移転したという手紙が来た。

鉾業権は、山本博一の息子ということげな。山本さんはそのころ50人くらいを使っ
ていた。

* 難解地名辞典によると、反高林 たんたかばやし 神戸市灘区住吉町

外録鉾山の鉾業権者竹内令さくの養子勲の話（1972年2月17日聴取）

私は小学校をでてすぐ15, 16歳のときから22, 23歳まで大阪に行き、神戸の貿易
商が振りだしで修行をつんで、昭和4年に岩戸に帰ってきました。私の住宅は岩戸神社
の前でした。土呂久まで歩いて行ったので、1泊するか、日帰りでしたね。私は鉾脈を測
定することがあったんです。どっちに掘っていいかわからんときに、坑内測量といって、
親父から習って相談に行くくらいでした。

そのころは川田（平三郎）さんが亜ヒ酸をやっていて、盛んになったのが昭和5, 6
年でした。川田は竹内から採掘権を借りて、1トン鉾石を掘るといくらかという計算で払
っていました。竹内は税金を払いながら鉾業権をもちつづけました。昭和8年に中島に
鉾業権を売ったとき、3万円くらいだったでしょう。

川田は佐伯の商人で、野村さんは川田といっしょに来た支配人みたいな人です。川田は
亜ヒ酸の事業をやる企業家でしたが、自分の資本じゃなく、神戸の山口商会の協力を得て、
品物をどこそこに送るというように請けてやっていました。山口商会は農薬会社で、山口
商会の主人が佐伯の出身だったので、「お前やってみるか」と、川田に言ったのではない
ですか。 (* 42-3と重複)

梅田太一著「貿易商名簿」（日本貿易協会調査部、大正6年11月11日発行）

B. 輸出商名簿 二. 神戸輸出商

綿糸、織物、薬品、一般輸出品 江戸町104 山本博一

第3編 輸入商名簿 二. 神戸輸入商

薬品、織物、雑貨 江戸町104 山本博一

神戸市会社名鑑（神戸市役所商工課編、大正12年2月25日発行）

株式会社 山本商店

所在 江戸町104

設立 大正 8 年 2 月 資本金 3,000,000

支店 大阪

出張所 横浜、哈爾濱、大連、京城、上海、天津、奉天、甲谷陀

目的 綿糸、綿布、メリヤス、燐寸、雑穀、天産物、肥料、油、麻袋、雑貨、鉢類、
薬品類、電鉄用レール、其他一切ノ直輸出入商

取締役社長 山本博一 常務取締役 山本顧弥太 同 山本久

神戸市商工名鑑（神戸市役所商工課編、昭和 5 年 3 月刊行）

織物及同製品（綿布）

営業費目 綿布、莫大小（メリヤス）、雑貨

営業種目 輸出入

取引地方 （記入なし）

営業収益税 出 10 万 （*出は、出資額のこと）

商号代表者氏名 山本貿易合資会社

営業所 江戸町 104

神戸市商工名鑑（神戸市役所産業課編、昭和 12 年 3 月刊行） 昭和 11 年 8 月～12 年 1 月調査

営業品目 綿布、綿製品、雑綿織物、人絹及絹織物、莫大小、絹、人絹綿沓下、瑠璃
鉄器、セルロイド、帆布靴一般雑貨

営業種目 直輸出入

取引地方 仕入先 大阪、和歌山、泉州、播州、岡山、名古屋、一宮、伊予其他
販売地 欧州、阿弗利加、濠州、亜米利加、印度、近東諸国

営業収益税 出 10 万

商号 山本貿易合資会社

代表者名 山本博一

営業所 神戸市江戸町 104

山本商店の歴史（上記 4 つの文書をもとに川原が作成）

山本博一の個人経営会社としてスタートしたのは明治末か大正初めだったろう。その取扱品は<綿糸>を中心とする繊維製品だったようだ。

米国の綿産地の殺虫剤に使うために亜ヒ酸は輸出される。つまり、綿の取扱→亜ヒ酸取扱に結びついたのではなかったか。

株式会社山本商店を設立したのは大正 8 年 2 月。資本金が 300 万円で、大阪に支店、満州や朝鮮に出張所を持つかなり大きな貿易業に成長した。急成長が、第一次大戦による需要拡大と大いに関係するだろう。ただ、亜ヒ酸販売が力になったかどうかは不明。

大正 13、14 年頃、岩戸の茅野鉦山を所有し、亜ヒ酸生産にまでのりだした。

だが、昭和初期の恐慌の中で大打撃を受け、株式会社は解散。本社にあった7本の電話を取り外し、山本貿易合資会社として再出発する。この浮き沈みが、亜ヒ酸生産の好不況の波と一致しているのが興味深い。

昭和12年ごろは、かなり盛り返して、諸外国と多種類の商品を貿易する会社になっている。

65-4 大正中期から後期にかけての亜硫酸業界

I 砒鉍業の概況

1. 大正期の亜硫酸業（「日本鉍業発達史 上巻」P108）

砒素は明治40年に於て4トン余の産額あり、価格僅かに500円余に過ぎず。以後依然として不振を続けたりしが、大正7年頃より産額急増し砒並に砒鉍合して年産7万円に達す。9年頃米国に於ける亜硫酸の需要激増するに及び各鉍山にて副産物として回収せらるるもの増加し、年産亜硫酸16万円砒鉍4万円に及べり。即ち足尾、神岡、生野、笹ヶ谷、檜銀井谷（岡山）、長登（山口）等何れも相当活躍し、足尾最も大にして大正12年29万円に達せり。此の外砒素として独立産土するものに内地琢美（兵庫）朝鮮の七宝（慶北）ありて当時大に活躍し、後者は13年の産額14万円に上れり。斯くて大正12年には内地亜硫酸の産額160万円余に達して最高記録を遺し、13年亦100万円以上を産せしも、14年より頓^{とみ}に減少して50万円余となり、其の以後は10万円乃至20万円を上下し、昭和4年の亜硫酸産額は（以下、不明）

2. 大正中期の笹ヶ谷鉍山（佐々木正勇『石見銀山鼠捕』について）

しかし、第一次大戦頃から、亜硫酸の主要輸出国であったドイツからの輸出量が減少し、他方、アメリカの棉作用撒布薬剤の需要が高まって、我が国の亜硫酸製造業が漸次活況を呈するようになった。笹ヶ谷鉍山では、大正7（1918）年8月から亜硫酸の製造を開始し、同9年に銅山部門を休山すると亜硫酸製造部門を九州亜硫酸工業株式会社に委託し、翌10年には経営を旧に復して亜硫酸鉍山として知られるようになったのであった。

3. 大正10年 本邦鉍業ノ趨勢 （以下、文中振り仮名、句読点は川原）

砒鉍業モ、亜硫酸ノ市価崩落シ輸出激減セル結果、俄ニ不振ニ陥リ、兵庫県琢美鉍山ハ遂ニ操業ヲ休止シ、直島製錬所モ砒素製錬ヲ中止セリ。

4. 大正12年 本邦鉍業ノ趨勢

砒鉍業 亜硫酸ノ市価ハ昨年来安定シ、次イテ輸出先タル米国ノ需要ハ逐年増加シタル結果、価格モ漸騰^{ぜんとう}シ、斯業ニ志スモノ漸ク多ク、本年ニ入り益々活気ヲ帯ヒ来

レリ、即ち岐阜県神岡鉍山、兵庫県生野鉍山、琢美鉍山、島根県笹ヶ谷鉍山等ハ、昨年ニ比シ其産額ヲ増加シ、又、兵庫県殿峯鉍山、岡山県一ノ宮鉍山、樫銀井谷鉍山、広島県阪田鉍山、金明鉍山、島根県鹿ノ谷鉍山等ハ、製鍊ヲ開始スルニ至レリ。

5. 大正 13 年 本邦鉍業ノ趨勢

砒鉍業 砒鉍酸ハ今尚米國ニ於ケル需要衰ヘス、市価^{ほほ}略安定セルヲ以テ、其増産ヲ企ツルモノ多ク、兵庫県琢美鉍山ハ、鉍夫ヲ増員シ前年ニ比シ 5 割ノ増産ヲ行ヒ、島根県笹ヶ谷鉍山ハ、坑内採掘ニ着手シ砒鉍酸粗製炉及精製炉ヲ増設シ、大分県尾平鉍山、横手鉍山、宮崎県山宇良鉍山、大吹鉍山、児洗鉍山、鹿児島県高隈鉍山ハ新ニ稼業ヲ始メ、大分県瓜谷鉍山、大切鉍山、宮崎県水無平鉍山、松尾鉍山ハ設備ノ拡張ヲ行ヘリ。但シ、後半期ニ至リ、滞貨次第ニ増加シ、市価^{ほほ}變調ヲ来シタル結果、山口県長登鉍山及金ヶ峠鉍山ノ如キ、事業ヲ縮小シ若ハ採掘ヲ中止セルモノヲ生スルニ至レリ。又、熔鉍炉ノ煙塵処理ヨリ来ル砒鉍酸産額ハ、岐阜県神岡鉍山ニ於テ前年ニ比シ 10 万斤ノ増加ヲ見タルモ、栃木県足尾鉍山ニ於テハ電気収塵装置ノ成績不良ノ為、其生産高ヲ減少セリ。

6. 大正 14 年 本邦鉍業ノ趨勢

砒鉍業 前年末ヨリ不振ナリシ砒鉍業ハ、本年ニ入リテ砒鉍酸ノ市価益々下落シ、為ニ山口県長登鉍山、大分県大切砒山、横平鉍山、宮崎県大吹鉍山等ハ事業ヲ休止シ、岐阜県長島鉍山ハ独立シテ稼業シ得サル窮地ニ陥レリ。但シ、兵庫県生野鉍山ニ於テハ砒製鍊設備ヲ増設シタルモ、之レカ為ニ増産ヲ見ス、又、銅或ハ鉛製鍊ノ副産物トシテ砒鉍酸ヲ回収スル栃木県足尾鉍山、岐阜県神岡鉍山ニ於テハ、比較的其影響ヲ受ケスシテ産額ハ前年ト大差ナシ。只、岩手県甲子鉍山ニテ砒鉍酸製鍊ヲ開始セルハ^{おや}稍注目ニ値スヘシ。

7. 大正 15 年 本邦鉍業ノ趨勢

砒鉍業 本邦砒鉍酸ノ最大消費國タル米國ニ於テハ綿花事業不況ノ為メ、我カ砒鉍酸市況ハ、依然トシテ不振ノ域ヲ脱スルニ至ラス、從テ、各鉍山共ニ生産^{ならび}並ニ販売ヲ手控ヘ本年度ハ全ク不況裡ニ終始セリ。即ち岩手県甲子鉍山ニ於テハ製鍊ヲ繼續セリト^{いえども}雖、^{わずか}纔ニ^{よせん}余喘ヲ保テルニ過キス。栃木県足尾鉍山ハ、前年ニ比シ粗製砒鉍酸約 9 割 4 分、精製砒鉍酸約 2 割 2 分減産シ、岐阜県神岡鉍山ハ、同シク精製砒鉍酸 2 割 2 分ヲ減産セリ。又、岡山県築瀬、山村、日吉ノ各鉍山ハ、何レモ休業スルニ至レルノミナラス、九州地方ニ於テハ、当業者ノ殆ト全部カ其ノ事業ヲ休止シ、唯、大分県佐伯町金子製薬所ニ於テ藥品トシテ砒鉍酸 9 万余斤ヲ製出セリト雖、而モ前年ニ比較スルニ實ニ 9 割 3 分ヲ減産セルノ状態ナリ。

